

字余り詠歌小考

齋 藤 真麻理

要 旨 慈円詠と西行詠との近似性はさまざまに論じられてきたところであるが、字余りという観点から作風の類似を指摘したのは、本居宣長であったと思われる。その説を検証し、両者の作風の相違点についても考察する。また、慈円に傾倒した一人の天台僧を取り上げ、その学芸の一端を考える。

一、

『正徹物語』には、卓抜な歌人である慈円像を象徴的に表す逸話として、人口に膾炙する伝承が載る。

名月の美しい晩、奈良の一乗院では力者たちが庭を掃きながら、「いかに今夜、慈円坊の歌よませ給ふらん」と噂していた。これを耳にした慈円の兄弟、一乗院門主は、歌道への愛着を戒めようと教訓状を届けた。

日夜風月のたはぶれをもてあそばせ給ひ候事、且は釈門の儀にも背き、還りて凡俗の躰に准ぜられ候事、無勿躰候。此室に召仕候奴原等、去夜の月に御身上を沙汰仕り候。まして天下の物いひ、さこそと推量仕り候へ。向後は此道を御さしをきも候へかしと存じ候。

（『正徹物語』）

すると、「悦び入り承り候」と慈円から返書が届いたが、その末尾には一首の和歌が書き添えてあった。

皆人に一のくせは有るぞとよ　これをばゆるせ敷島の道

（同右）

これを見た門主は、「沙汰の限り」と諫言を諦めてしまったという。

生涯、敷島の道を愛して止まなかった慈円であるが、その歌集『拾玉集』のうち、最善本と言われる青蓮院本は収録歌数六千首を超える⁽¹⁾。

慈円の作風について、『後鳥羽院御口伝』は「大僧正はおほやう西行がふり也」と評した。

大僧正は、おほやう西行がふりなり。すぐれたる歌、いづれの上手にも劣らず。むねと珍しき様を好まれき。まことに、そのふりに、多く人の口にある歌あり。（中略）されども、よのつねにうるはしく詠みたる中に、最上の物どもはあり。

（『後鳥羽院御口伝』）⁽²⁾

『為兼卿和歌抄』は、万葉の世には心の赴くままに「哥詞、たゞのこと葉ともいはず」歌を詠じたと述べ、そのように「心をさきとして詞をほしきま、にする」歌人として、西行や慈円の名を挙げる。

万葉の比は心のおこる所のまゝに同事ふたゝびいはるゝをもはゞからず、褒貶もなく、哥詞・たゞのこと葉ともいはず、心のおこるに随而ほしきまゝに云出せり。(中略)是にたちならばんとむかへる人々の、心をさきとして、詞をほしきまゝにする時、同事をもよみ、先達のよまぬ詞をもはゞかる所なくよめる事は、入道皇太宮大夫俊成、京極入道中納言、西行、慈鎮和尚などまで、殊おほし。

こうした歌は、歌ではなく「物語」であると評されたともいう。⁽³⁾

しかし、歌の着想や内面性の近似ばかりではなく、全く別の観点から両者の詠歌に深い関心を寄せた一人の先人がいる。それは本居宣長である。⁽⁴⁾

二、

『新古今集美濃の家づと』に於いて、宣長は西行の詠歌「岩間とぢし氷もけさはとけそめて苔の下水道もとむらむ」を引き、

初句もじあまりいと聞きぐるし、此法師の歌、此病つねにおほし、
(一の巻)

と評し、また「小ぐら山ふもとの里に木葉ちれば梢にはるゝ月を見る哉」について、

三の句、もじあまりいと聞きぐるし、例の此のほうしの、わろきくせなり、
(二の巻)

と述べた。「すつとならばうき世を出るしるしあらん我にはくもれ秋のよの月」は「初句もじあまり、例の聞ぐる

し、「風になびくふじのけぶりの空にきえて行へもしらぬ我思ひ哉」は「初句三の句、例のもじあまり聞ぐるし」、「いかゞすべき世にあらばやは世をもすて、あなうの世やとさらに思はむ」は「初句三の句もじあまり、例のいと聞ぐるし」（五の巻）と、宣長は徹底して西行の字余り詠を批判する。

さらに宣長は、慈円詠「霜さゆる山田のくろのむらす、きかる人なしに残る比かな」を掲げて、

此僧正の歌、かゝるたぐひ多し、西行がふりをまねばれたるもの也、
(二一の巻)

と断じた。同じく「野べの露は色もなくてやこぼれつる袖より過る萩のうはかぜ」（四の巻）、「おのが波に同じ末葉ぞしをれぬる藤さく田子のうらめしの身や」（五の巻）もそれぞれ「初句、例のもじあまり聞ぐるし」「初句、もじあまり例の聞ぐるし」と難じられている。

すべて此僧正の歌、西行が、心にまかせて、みだりによみちらしたるふりを、うらやみてよまれたりと見ゆるが多し、その心して見べきなり、
(五の巻)

というのが宣長の主張であった。

安永五年（一七七六）刊の『字音仮字用格』でも、字余りを多く詠む作者として西行の名が挙げられている。

又歌ニ五モジ七モジノ句ヲ一モジ余シテ六モジ八モジニヨム事アル是レ必中ニ右ノあい^{なから}うおノ音ノアル句ニ限レルコト也、えノ音ノ例ナキハイカナル理ニカアラム、未^レ考、古今集ヨリ金葉詞花集ナドマデハ此格ニハヅレタル歌ハ見エズ、自然ノコトナル故ナリ、万葉以往ノ歌モヨク見レバ此格也、千載新古今ノコロヨリシテ此格ノ乱レタル歌ヲリノ見ユ、西行ナド殊ニ是ヲ犯セル歌多シ、
(『字音仮字用格』)

西行が字余りを好んだことは、夙に鎌倉時代の歌学書『八雲御抄』に指摘されているところである。

又たけを高からむゆゑに、文字をあます事このむ人おほし。是も返すくみぐるしき事なり。是は西行などが

いひたきまゝにいひたるを、まねびてあしくとりなすなり。

〔八雲御抄〕

けれども、両者の類似を「字余り」という観点から学問的に解明したのは、本居宣長晩年の著作『玉あられ』であろう。本書は寛政四年（一七九二）の刊、その「歌の部」に、字余りの法則をめぐって慈円の詠歌に言及した指摘がある。まずは宣長の発見した字余り法則を参照しておこう。⁽⁵⁾

五もじの句を、六もじにより、七もじの句を、八もじによりむことは、其句のなからに、あゝいゝうゝおゝの内のもじある時にかぎれることなり、たとへば へ身にしあれば、へ須磨のあまの、花のいろは、へきくやいかに、へいせのうみや、へしがのうらや、へ風のおとは、へいはでおもふ、などの如し、七もじの句も、なずらへて知べし、

（『玉あられ』歌の部「もじあまりの句」）

宣長は、字余りの実例に「身にしあれば」「須磨のあまの」「花のいろは」「きくやいかに」等々を挙げ、字余り句のうち、余った音数と同数の母音「あ」「い」「う」「お」のいずれかが句中に含まれていれば耳に障らず、字余りで見做されないと述べた。また、古歌には「云々と思ふ」と続く作例が多いが、これも字余りにはならない、例えば、

日ぐらしの鳴つるなへに日はくれぬとおもふは山の陰にぞ有ける

という場合、「と」文字は次の第四句に続く解釈でき、第四句には母音「お」が入っているために字余りではないと説明した。

そもく古き歌には、五もじの句を七もじに、へさもあらばあれとよめるさへこれかれあれど、わろからぬは、あまれる二もじ、あもじなる故ぞかし、又古今集に、へ日ぐらしの鳴つるなへに日はくれぬ句とおもふは山の陰にぞ有ける、これらは、ともじ下なる句につく故に、四の句もじあまりにて、三の句は然らず、すべてへ

云々と思ふ、とつゞく所には此例多し、かやうなるはともじは、次の句へつくこと也、大かたもじあまりは、右の如く、あゝいゝうゝおゝの四つの内のもじの、なからにある句にあらずは、よむまじき也、

〔玉あられ〕歌の部「もじあまりの句」

この法則性を無視した歌人として、宣長は西行と慈円とを挙げている。⁽⁶⁾

大方古今集よりこなた、此格にはづれたる歌は、をさ／＼なきを、新古今集のころにいたりて、西行慈円など、これを犯して、みだりにもじのあまれる句をおほくよまれしより、近き世になりては、殊に多し、（同右）西行と慈円の類似性は、様々な視点から論及されて来た。しかし、字余りという観点から両者の近似を看取し、慈円詠の音数破格をその作風として指摘した先人は、宣長以外には見出せないようである。

宣長の言は、実際に検証される必要がある。『拾玉集』の最善本と言われる青蓮院本は歌数最多の約六千首、これを素材に選び、慈円詠以外の古歌・詠歌を対象外として字余り例の概数を示すならば全体で一三四八首ある。そのうち、句の中に母音を含まず、宣長の字余り法則に抵触する字余り例は六〇五首に上った。慈円の字余り詠のうち、宣長のいう法則性を無視した例は四割を超えることになる。このような定数破壊は、奈辺に起因するのであるうか。

該当句を検討すると、字余りを引き起こした大きな要因は二点あるように思われる。

第一は、助詞を明確に示して省略しないことである。非常に叙述的であると言い換えても良い。一文字省略すれば音数が合う箇所に、わざわざ助詞を入れるのである。特に、初句と第三句に字余りを持つ例が多い。

以下、その一端を挙げてみたい。宣長の字余り法則に抵触する句にのみ、傍線を付したが、一三七七番や二三五二番の歌のように、法則に抵触しない字余り句を同時に含む歌も存在している。

まず、初句に字余りを持つ例である。

晴天帰雁

八二二 こしの山の雪けの雲もはれのきて みとりをわくるかりの諸こゑ

月

一〇五三 秋の月のくもらぬことはならひなり 心はれては誰かみるらん

河

一〇九〇 よものかははよとのなかれにおちあひて ひとつわたりに成にける哉

天象十首

月日星霞雷霧時雨雪雲風

一五一一 雪の下をくくるかややの夕煙 心ほそさは猶そむかれぬ

日吉百首

二二七七 むねの月を心はかりにみかききて われも光を見ぬそかなしき

神祇

二三三五 石清水にやとして見よとちかひける 神の光や秋のよの月

草

二四五四 夜半のむしのすたくを見るもあはれなり 朝露はらふ庭の小はきに

続いて、第三句に字余りを有する例を示す。

松

九五五 ゑにかきていさもろこしの人に見せん 霞わたれるこやのまつ原

薄

一〇四三 花すすき夏の鹿をまねきとりて わか物にする夕ぐれの声

月五十首

一三七七 春も秋も思わかれぬふかき山に すむなる人も月はみるらむ

寄雲恋

一七六二 こひしぬるよはのけふりの雲とならは 君かやとにやわきてしくれん

日吉百首

二二四九 はつ雁の雲に入ぬる旅の空の すゑ色ふかき秋風そふく

雨

二三五二 このはおちて梢さひしき冬の山を むなしくめくる夕時雨哉

山家

二四七二 山里をとひくる人にわれもならむ いつくも花ぞあるしなりける

初句や第三句の字余りは、全体の調子を大きく損なうことなく、歌の響きを荘重にする効果があるとも言えよう。後述の通り、これは西行にも見られる特徴である。

しかし、慈円は、第二句と第四句にも字余りを用いる。まず、第二句の字余り例を挙げてみる。二二七六番は法則に抵触しない字余りをも含む歌である。

冬二十首

一一九〇 さよふけて千鳥なくなりときくままに うらはの松に風も吹なり

日吉百首

一二七六 吹きはらへ何となきちりの身にをくを 家を出にし山おろしの風

雑三十首

二五九六 よしあしを思し人そ難波かた とてもかくても世に有かたき

冬十五首

三三三二 中々にしくるへき空の村雲を はこふあらしにぬるる袖哉

次は第四句の字余り例である。

日吉百首

二二七九 はかなしや見し世の人ののこりゐて 物語するもあらはこそあらめ

雑十首

二八五一 あふ夢もかなはぬ夢もうつつにて 思ひとくかたもなき世なりけり

略秘贈答和歌百首

三五九六 もろともに鹿こそはなけれの秋 もみちちる山のみねのあらしに

さらには、一首の中に二回の字余りを含む歌も躊躇なく詠んでいる。例えば、第一句と第三句に字余りが見られる例がある。

冬十五首

二五六八 今はふゆかおほつかなやと思ふそらに まきのはわくるはつ時雨哉

冬十首

二八四二 秋の花のひとりのこれるきくのませも うつろふ色になるそかなしき

厭離欣求百首

三三八四 春のかりの花の都の空を行に たくふ心のなとなるらん

初句と第二句に字余りを持つ例は、

雑三十首

二五九一 物のはちを思しる人はとにかくに 心と身とそ世にありかたき

雑十首

二八五二 たひの空にたくひなき物はよはの月 浪のまくらに草の枕に

住吉

二八七五 松にちきる住吉の神そたのもしき 君か千とせのためしとおもへは

などがあり、初句と第四句とに字余りを詠んだ歌に次のような例がある。

日吉百首

二三四〇 とひし人もくひなにのこす名残哉 あとふかき山の槇の板戸に

江月

四二一八 難波かたえそいふましき人なとひそ かくやとる月はいつも見さりき

以上の歌群から、慈円が自由自在に字余り句を駆使している様子が窺われるであろう。この上に「仏教語・漢語の和訳」という要素が加わると、さらに歌は説明的になり、字余りを引き起こす。例えば、「地獄」と題する和歌

では、業火燃える奈落の有様を取り上げて、

二九二九 つちのしたにもえてもゆるたけき火を いかなる人の思けつらむ

と詠むのであるが、地獄という「地下世界」は「つちのした」という和語に和らげられ、助詞「に」が挿入されて次の句へと続いてゆく。それが字余りを生むこととなる。

また、「霊鷲山」を詠み込んだ一首に、

弥勒

四一八五 わしの山のかはりて出る日を かそふる程そけにははるけき

という作がある。「鷲の山」という和語に和らげた上に助詞を補ったために、字余りとなっている。

続いて、「縁覚」を題に詠んだ歌を挙げてみる。

二九三六 ひとりさとるみちときくこそうれしけれ たつたのもみちみよしの花

縁覚とは、無仏の世に出て師もなく独り悟る者を指し、別に「独覚」とも称する。慈円はこれを「ひとりさとる」という字余り句で表現した。

三四〇〇番の歌には「雪の山の鳥」が登場する。

三四〇〇 雪の山の鳥のよそにも思ふなよ むすはて結草のとさしを

「雪の山の鳥」とは、天竺雪山に住む「寒苦鳥」のことである。この想像上の鳥は巢を作らずに暮らしているため、夜の間は酷寒に苦しみ続ける。そこで、「明日は起きて巢を作ろう」と鳴き通すのであるが、朝日が昇ると途端に苦しみを忘れ、巢作りなどしても無意味だとばかりに空しく時を過ごしてしまう。これを毎日繰り返し、苦痛から逃れることがない。「寒苦鳥」は、人間が現世の苦界に身を置き続け、安らかな解脱の道を求めようとしない比喻

に用いられる。数々の釈教歌の題に選ばれた譬えであつた。⁽⁷⁾

一例を示すならば、「雪山寒苦鳥」を題に詠んだ中納言実守の歌がある（『宝物集』）。

雪山寒苦鳥 中納言実守

雪に住む鳥とやいはん卯花^{うのはな}の 陰にかくるゝ山ほととぎす

（『宝物集』 卷第二）⁽⁸⁾

ここでは「雪に住む」とのみあつて、字余りを引き起こしていない。しかし、同じ題材を慈円が詠ずると、「雪の山の鳥のよそにも思ふなよ」の字余り詠になること、先に見たとおりである。

このほかにも、「開仏知見」を、

二六三〇 世に出て仏のみちをひらく人は もとの心のおるなりけり

と詠じ、「北斗曼陀羅」を素材に、

五九四四 北のほしやあつまのたひにいつる人を 祈ひかりは空にみゆらん

と詠んだごとく、その詠歌には字余り例が頻出する。

慈円には仏教関連の著作もあるが、そうした営為は、仏教概念やその用語を如何に咀嚼すべきか、常に慈円に自問を促したであろう。⁽⁹⁾

以下、字余りの具体例を若干加えておく。

聞法述懐

九〇一 のりの門にころをいれて思哉 たたうき世をはいつへかりけり

無有魔事

二六六一 ことをさふる物こそなけれさてももし あるはさなから法の里人

是名持戒

二六八五 ひとつ法をしはしたもては十の玉^{しゅみ}を けかさぬ人に成にける哉

一 龍女成仏

二六九〇 玉ゆら^{へ*}に出ぬと見えし海の月の やかて南にさしのほる哉

唯毒自明了

二七二六 よそにしらぬ人のけしきはさもあらはあれ ひとり心の月を見る哉

色界

二九二二 いろをふかくそめはてぬれはたち返り 心すすしき天の羽衣

声聞

二九三五 われもしらてこの世のほかへ行とかや 又むまれしと契しるしに

下品下 尺恵近

五二九六 しもをねかふひとの心のきよければ にこらてかへる沖つしら浪

我立柚之中幽居谿之洞有靈山院忍鷲峯跡欣彼恵心之素懷呈此愚老之丹棘授恋慕於雙淚載至
孝於竹篇唯志之所之更忘人之嘲而已

六〇〇五 鷲の山仏のみちのひとつなるに わか思ふ人ををしへいれつる

また、仏教語と同じく、漢語の和訳の場合も音数増加の一因となつたと思われる。例えば、慈円は歌題「納涼」を「夏もなくて」と和らげて詠む。

一四二四 夏もなくて過ぬるかと思ぬる たつたかはらの柳かけには

同様に、歌題「歳暮」は「としのくれて」という和語に置き換えられた。

二〇五六 としのくれてわか世もふけぬ山のはに かくなはてそ有明の月

歌題に「野亭深雪」とある次の一首では、「深雪」を「つもる雪の」と表現している。

四六七九 つもる雪のすこしたかきや人のいほ みちこそなけれけふりたにたて

或いは「月照山居」を「山にすめとをしへし月は」という字余りに詠んだ場合もある。

三五二七 山にすめとをしへし月はなけれども いつるも入もわれになしつ

以下、歌題を和語に和らげた例の一端を示しておく。

花下忘帰因美景

二二一九 春の山に霞の袖をかたしきて いくかに成ぬ花の下ふし

閑日一思旧旧遊如目前

二二七四 なかめわふる軒のしのふに露おちて 昔をかへすゆふ暮の空

惜花

四〇九九 おしみかねて庭の花にも契かな いとはし今は春のやまかせ

一方、反復・並列的な言い回しも慈円の好んだところであった。漢詩的世界からの影響をも受けた慈円の作風を良く表す特徴と思われ、字余り例以外にも頻出する。

反復・並列表現の字余り詠は「山家十首」のうちの一首、

三三七二 としもたけぬ身のありさまもなきに成ぬ さて山里をよそにみよとや

をはじめ、「置心世事外無憂亦無喜」を和らげた、

二一八六 うしつらしと思しことのうせ行や この世のほかの心なるらんの詠などが該当する。「常在靈鷲山」を詠んだ

二七〇六 やみのよるもひるをもわかすわしの山 いつものとかに有明の月は、「常在」を「やみのよるもひるをもわかず」という並列表現で捉えなおしている。これらが端的に示すとおり、反復や並列表現は、しばしば慈円の字余り詠の大きな要因となつたと考えられる。

野

一〇九一 春も夏も冬もなかめはせしかとも 野へのけしきの秋の夕くれ

雑五十首

一六一七 われも人もたた心をそいとふへき おほかたのよは住吉のみや

草花

二〇四二 鹿も虫も暮て哀をそふ野へに 萩こそよるの錦成けれ

冬十五首

二五七八 松と竹と花はまたみす冬のけさ こほれる雪のきえやらぬ哉

雑三十首

二五八四 月もほしもさやかにてらすかひそなき このよの人のうはの空こと

雑三十首

二六〇九 有かなきかなはかなやのためし哉 反故やく灰の風にふかれて

釈教

四七六〇 さてもさてもののこるひしりのうれしきは わしのみ山に出し月影

このほか、「いかにせまし」など、慈円の好尚を反映した字余り表現が繰り返し用いられている。抑も仮名文には対句・並列的表現は似つかわしくなく、これを用いるに細心の注意を要したはずである。⁽¹⁰⁾

恐らく、助詞の多用、説明的な和訳、並列反復表現の多用などが、慈円の字余り句の大きな原因であったことは動かないであろう。

三、

西行と慈円とは生前に交流があり、濃厚な影響関係があったことは事実である。また、この二人は、定家、家隆をさへ、猶歌作りと仰せ給ひしとなり。慈鎮和尚、西行をこそ歌詠みとは仰られしか。

〔「やめい」と〕

慈鎮、西行などは歌よみ、其外の人は歌作りなりと、定家の被書たる物にあり。

橘つむあかのおしきのふちなくは何に蔽の玉たまらし

(中略) 其余は歌作りなり。古詞をつらねて三十一字にしたる計にて、作も余情もなければうたも作りたる迄にて我力なし。

〔兼載雑談〕

其後又後京極殿、慈鎮和尚、俊成卿、西行上人、定家、寂蓮などは殊更珍しき姿、目さめたる一興のかゝりこそおほくよませ給て候へば、今も不叶迄も、まなび候はん事、子細やは候べきと覚え候。

〔「一言抄」〕

と並び称され、崇敬され続けた存在でもあった。⁽¹¹⁾

今、字余りという視点から再読するならば、西行詠はどのような様相を呈するのであろうか。『私歌集大成』を材料に概観してみると、『山家集』は詠歌総数一五五二首、字余り歌総数二七八首、字余り法則抵触例八八首。『西行上人集』は総歌数七八六首、字余り歌総数一二二首、字余り法則抵触例三三首。『聞書集』総歌数二六三首、字余り歌総数七三首、字余り法則抵触例二九首。『残集』総歌数三三二首、字余り歌総数二二首、字余り法則抵触例一首という結果になる。字余り句の法則抵触率は、それぞれ約三割、二・七割、四割、五割。但し、『残集』は収録歌数そのものが少ないため、『山家集』などと同列に扱うのは難しいと思われるが、大略、字余り全体のうち、三割前後が宣長の音数法則を破っていることになる。

西行の字余りの特徴は、概ね次のようにまとめられよう。第一に、慈円のような漢語の多用は見られず、仏教語の和訳も慈円ほどは多くないようである。第二に、助詞多用も慈円に比して顕著ではない。総じてごく自然な詠み方であり、自然に文字が余ったという印象を受ける。無作為が自ら字余りを生んだとも言えようか。さらには、初句に字余りを持つ例が比較的多い。

慈円はこうした「破調」に共感するところがあったのかもしれないが、既に見た通り、慈円の場合は縦横自在に字余り句を取り入れ、一首に複数の字余りを有する歌さえ残している。字余り例全体に対する、法則抵触例の占める割合も高い。西行と比べ、慈円の方が圧倒的に多く「みだりに文字の余れる句」を詠んでいると言わざるを得ない。両者は様々な視点から類似性を指摘され来たったが、字余りに限って言えば、その性質は同一とは言い難い。なぜ、慈円はこのように極めて個性的な字余りを詠んだのであろうか。

この問を考えるに当たって、慈円が韻文のみならず、散文の世界にも相亘っていたことは貴重な示唆を与えてくれるように思われる。就中、慈円著『愚管抄』は歴史書としても名高いが、本文は難解を極め、本書を孤例とする

表現など語義不明のまま現在に至っている箇所も少なくない。同書巻第六に於いて、慈円は自らについて「山ノ座^ざ主慈円僧正ト云人アリケルハ、九条殿ノヲト、也、ウケラレス事ナレド、マメヤカノ歌ヨミニテアリケレバ」と述べたが、歌人としての名声とは裏腹に、『愚管抄』の文章はともすれば酷評の対象となりがちであった。⁽¹²⁾

確かに、『愚管抄』を一読する者は誰しも、擬音語・擬態語の頻用、同語の反復、並列等々を強く印象づけられるに違いない。疊語的表現の多さに至っては、「イカニシテ又ナリくハセラレケルニヤ」(巻第二)をはじめ、「イカニモく」「サラニく」「カナラズく」「コトニく」など殆ど煩わしいほどに頻出する。その一端を書き抜いてみたい。

人代ノハジメ成務マデ、サワくト皇子くツガセ給テ、正法トミエタリ。(中略)又イマモくヨロヅハヤソルベキコト也。(中略)次第二オトロヘテハ又オコリくシテ、オコルタビハ、オトロヘタリツルヲ、スコシモチオコシくシテノミコソ、今日マデ世モ人モ侍ルメレ。(巻第三)

近臣愚者モテナシくシツ、(中略)随分くニハアル事ゾカシ。(中略)サラニくゲニくシキ事ナシ。(巻第四)

(中略)ヒキカウブリテトノゴモリくシテヒトエニ違例ニナリテケリ。(巻第五)

諸国ニスクナくトアテ、(中略)ウタセくシテアリケリ。(巻第六)

ミソくトシテサテヤミニケリ。(中略)シラケくトシテヤミニケリ。(中略)イカデカくソノムクイナカラン。(巻第六)

居ヨリくセサセ給テ、(中略)ヤウくサマぐナルヲ心得ヌ人ニコ、ロエサセンレウニ、セウく心エヤスキヤウカキアラハシ侍ベシ。(中略)アマリくシテ(中略)メデタク申ナヲシくテ(中略)ツヤく物モシラヌ人ノワカくヲロカくトシタルニ、(巻第七)

〔愚管抄〕

甚だしきは、「トノゴモリくシテ」「ウチミアゲく」「イササカモく」「殊勝くノ事カナ」「居ヨリくセサセ給テ」「ユクくトタガヒくシテ」「ムマレアヒくシテ」「アマリくシテ」「申ナヲシくシテ」「アシカリケリくト」「アザヤカくト」「シツカニくヨクく」等々、枚挙に暇がない。

このほかに並列的表現も頻出しており、「ツ、ヤキサ、ヤキ」「ヨキモヨクテモトヲラズワロキモワロクテモハテヌ」などをその好例と言うことができる。

慈円は無意識にこうした特異な文章を書き上げたわけではなかったようである。『愚管抄』の本文中、二箇所に亘り、慈円は本書で用いる言葉の選択に当たっては重大な決意を持つて臨んだと述べている。それはほぼ次のように要約することができる。

本書を仮名で書くのは「物シレル事ナキ人」のためである。今の末代を見ていると、貴賤を問わず、僧俗の別なく、真名の文字を読んでもその正しい筋道を悟る人はいない。けれども、仮名、それも「ヤマトコトバノ本体」と思われる言葉を用いたならば、必ずや読者に通ずるであろう。

仮名ニ書タルモ、猶ヨミニクキ程ノコトバラ、ムゲノ事ニシテ人は是ヲワラフ。ハタト・ムズト・シヤクト・ドウト、ナドイフコトバドモ也。是コソ此ヤマトコトバノ本体ニテハアレ。此詞ドモノ心ヲバ人皆是ヲシレリ。アヤシノ夫トノ^{おほくの}中人マデモ、此コトノハヤウナルコトグサニテ、多事^{おほくの}ヲバ心エラル、也。是ヲオカシトテカ、ズハ、タゞ真名ヲコソ用イルベケレ。此道理ドモヲ思ツケテ、是ハカキ付^{つけ}侍リヌル也。

（巻第二末尾）

最終巻の巻第七冒頭に於いても、同趣旨の言葉が書き連ねられている。即ち、文字とは梵本から始まり、漢字が当てられ、日本国の人はそれを「ヤハラゲテ和詞^{やまとことば}ニナシテ」理解するようになったが、それでもまだ真意に到達す

るのは難しい。そのため、この書は「戲言ニテカキヲキ」、「スコシモソノアト世ニノコルベキ」と思つて書いた。「ヲカシクアサキカタニテスカシイダシテ、正意道理ヲワキマエヨカシ」と願い、ひたすら「耳トヲキ事」を削つた。「ムゲニ輕々ナル事バ共ノオ、クテ、ハタト・ムズト・キト・シヤクト・キヨトナド云事ノミヲホク」用いたのは、これが「和語ノ本体」であると考えたからである。漢字を充てれば見劣りする言葉であつて、識者の嘲笑は免れ得ないかも知れないが、これこそが「日本国ノコトバノ本体」であらう。ある時や場所の氣配を明確に表現しようとした時、「ハタト・ムズト・キト・シヤクト・キヨト」などの言葉こそが大きく役立つ。これを「児女子ガ口遊」として批判するのは、「詩歌ノマコトノ道ヲ本意ニモチイル時ノコト」に限られる。今は愚癡無智の人にも道理を理解させようとして仮名で書くのだから、そう心得て読んでほしい。時代が移り変わつて行く道理を、「コロニウカブバカリニテ」述べたものである（巻第七）。

仏教関連の著作も多く著した宗教者慈円にとつて、仏教語や經典の翻譯をめぐる問題は常に心に去来するところであつたろうし、漢語の和訳についても念頭から離れなかつたであらう。その上で、漢語ではなく和語、それも平俗な表現の自在な駆使こそ重要であるという強い認識をもつて書かれたのが『愚管抄』であつた。擬音語や擬態語を頻用し、「ヒワノクルミヲカカヘ」「トナリノタカラヲカゾフル」など、卑近な比喩表現も厭わずに使用している。「コロニウカブバカリ」、自由闊達に言葉を選び取つていつた結果として、接続語、特に「テ」「ニ」助詞を多用したため「徒に文章が長く」、反復や畳語を多用して「懇々と説きあかそうという姿勢が見られる」と評される『愚管抄』の文章が紡ぎだされたのであつた。⁽¹³⁾

翻つて、慈円の詠歌に視線を戻すならば、そこには散文である『愚管抄』の特徴、とりわけ助詞の多用や反復畳語の頻出などを、そのまま慈円の字余り和歌の特徴として見出すことができよう。慈円の韻文における音数破格、

即ち字余りは、『愚管抄』の口語俗語を繁用した「悪文」と軌を一にしており、相互に相関する慈円の言語使用の特徴である。言葉に対する慈円独特の感性は、散文と韻文という隔たりを超えている。

ふかくしれ人の有をぞ世とはいふ　そむかば人の世もあらじかし

右は『拾玉集』第二二六一番の歌。雅俗を嫌わず、縦横無尽に詞を駆使して「人の世」に在り続けた歌人、慈円に相応しい佳歌である。

四、

卓抜した和歌の才と、言葉に対する独自の見識とが渾然一体となった慈円の和歌は、讃嘆とともに後世に伝えられてゆき、それは天台宗の末々にも及んだ。室町後期の天台僧実海は、慈円に傾倒した一人に数えられる。都から遠く隔たった関東天台の談義所に於いて、彼は自らの著作『轍塵抄』に慈円恭敬の思いを書き留め、詠歌を多数引用した。歌風は無論、天台座主への敬慕もあったであろうが、内典の研究や注釈に勤しんでいた実海にとって、先述した慈円詠の特徴も共感を呼ぶものだったかも知れない。

実海は『本朝高僧伝』巻第十八「武州喜多院沙門実海伝」にも略歴が記されており、関東天台を代表する学匠であった。武蔵国仙波喜多院は著名な関東天台の談義所の一つであるが、実海はその住持として学問研鑽に励み、多数の著作を著している。

釈実海。武州川崎人。

或曰品川

自_レ幼俊利。思出_二群童_一。早入_二教寺_一。剃髮肄_レ業。嘗在_二檀越大田道灌宅_一。呼_二僕夫_一

曰。将_二盥水之水_一来。

俗語漢語謂為手水

道灌在_レ傍曰。盥水而足矣。将_二非刺語_一乎。海曰。若唯盥水。或持_レ湯来。道灌動_レ

容深服敏捷。長涉論場。負魁博名。住星野山喜多院。関左右徒負笈逼塞。化衆之暇著述夷希集轍塵各十卷。鹽味集二卷。教觀大綱見聞賞三卷。天文二年示寂。壽八十八。在星野山。時有莫札者。凶惡無比。死日請海送終。化人來曰。彼罪弥天。必莫法救。海謂釈氏之道善惡齊利。豈忍拒之。乃整威儀出於郊外。俄怒雷轟天。電掣迸空。海拳扇曰。我代受苦。須臾雷止雲収而克葬。海寂三年。寺後杉上有声曰。我代莫札入地獄受苦。今已免之。即不見矣。賛曰。一切如來大慈悲觀音。一人代受苦。海之言迹与経符号矣。夫内秘菩薩之人也與。

【轍塵抄】は実海の手によって大永六年（一五二六）年に成立した『法華経』注釈書である。⁽¹⁴⁾ その法師品の一節にいう。

慈鎮和尚ハ天台座主ニテ、和歌ノ達人也、幾許ノ哥カ御座ス覧ナレトモ、オホケ無ク浮世ノ民ニ覆哉我立杣ノ墨染ノ袖 此一首ヲ、定家ノ卿小倉山ノ庄ノ色紙ニ拔出サレケルモ矣、実ニモト覚タリ、民ニ覆袖ハ如来衣也、我立杣ヲ栖トスル者ハ、大慈悲ノ宝諸法空為座ノ心歟ト愚意推セリ、

（『轍塵抄』）

天台宗最高位にあつた慈円への崇敬もさることながら、「和歌ノ達人」としての慈円を讃嘆している。実海は歌道に少なからぬ関心を寄せていたようである。

中世『法華経』注釈書の特徴の一つは、先行の注釈書と引用説話や和歌がかなりの頻度で一致することであり、諸書に慈円の詠歌や説話も見られる。また、とりわけ和泉式部伝承歌が重用されることは注目すべき点である。⁽¹⁵⁾ 例えば、『轍塵抄』に先行する『法華経鷲林拾葉鈔』は、実海が親交を持っていた常陸国黒子千妙寺の住持、尊舜の著した『法華経』注釈書であつて、その序文は実海が執筆している。この書にも多くの和泉式部詠や伝承歌が収載

されている。従って、実海は和泉式部詠をはじめ、先行書に引かれた和歌を熟知していたわけであるが、『轍塵抄』には式部の伝承歌は一首も引かれていない。僅かに名歌「冥きより冥き道にぞ入りぬべき」一首を挙げるに留めており、『拾遺集』を出典として明記する。この詠は先行の『法華経』注釈書も引くが、歌人名については、「式部」「和泉式部」などと記される。一方、『轍塵抄』は「雅致女式部」とする。この表記方法は『拾遺集』に同じい。引用に際し、実海が厳正な態度で臨んでいることを端的に示しているよう。

その他の和歌についても、概ね出典や作者名が注記されており、一読、実海が従来の『法華経』注とは一線を画し、極めて実証的に『轍塵抄』を執筆したことは明白である。また、他の注釈書が本文中に和歌を鏤めているのに対し、『轍塵抄』は僅かにそうした例が認められるものの、各品冒頭に和歌をまとめて掲出、あたかも釈教歌集を思わせる方法に拠る。勅撰集と個々の家集の釈教歌群から和歌を抄出しており、『法華経』各品と無関係な和歌や、別の品の和歌を転用することはない。

『轍塵抄』の慈円詠の殆どは『拾玉集』収載の「法華要文歌集」から採られ、『新古今和歌集』ほかの勅撰集からも採られた。総数百首余に上り、その傾倒は群を抜いて目を引く。実海は『訳和和歌集』と題する釈教歌集をも編纂しており、同書に引かれた慈円詠が支子文庫本「法華要文歌集」と重なることが指摘されている。¹⁶『訳和和歌集』所見の慈円詠の多くは『轍塵抄』とも一致する。

実海は、「心をさきとして、詞をほしきま、に」「先達のよまぬ詞をも」はばかりぬ慈円の「歌よみ」ぶりに敬服したに違いない。¹⁷さらには、助詞を省略しない説明的な和訳、並列反復表現の多用などという慈円詠の特徴も、実海の心を捉えたのではないだろうか。実海もまた、仏教書の注釈に励み、和漢の詞の間を往来し続けた学僧だったからである。

実海がどのような伝で慈円の歌集を手にしたのか、現段階では詳らかでない。しかし、『拾玉集』は青蓮院に伝存、叡山文庫にも要文百首が伝来し、かつては曼殊院にも『拾玉集』が所蔵されていた。なお、先出の関東天台の談義所千妙寺は、三昧流の継承寺として京都青蓮院と深い交流があった（『三昧流由来事書』ほか）。実海が宗派内の伝を辿り、支子文庫本「法華要文歌集」と同系統の写本を披見する機会を得た可能性も考えられよう。慈円詠歌の受容の一例としても、中世『法華経』注釈書史としても注目される。

『轍塵抄』が慈円詠に次いで多く引くのは、俊成・定家の和歌である。その具体を示してみる。出典は『長秋詠藻』『拾遺愚草』や勅撰集である。概ね、出典は歌頭にやや小さく、作者名は歌の末に記され、一首一行で書かれる。

長秋詠藻
春雨ハコノモカノモノ草モ木モワカス緑ニ染ル也ケリ

大夫俊成卿

〔轍塵抄〕 薬草喻品

右の詠は『長秋詠藻』四〇七番に相当する。俊成詠の場合、『長秋詠藻』下、新編国歌大観番号四〇三番から四六八番までの六十六首から集中して採歌されている。この部分は釈教歌群であって、四〇三番は「康治の比ほひ、待賢門院の中納言のきみ、法花経廿八品歌結縁のため人人によますとて、題を送りて侍りしかば、よみて送りし歌」の詞書で始まり、各品の詠歌が収録される。一例を挙げる。

安樂行品

深入禪定、見十方仏

四一六 しづかなるいほりをしめて入りぬれば一かたならぬ光をぞみる

湧出品

従地而湧出

四一七 池水のそこより出づる蓮ばのいかでにごりにしまずなりけん

寿量品

現有滅不滅

四一八 かりそめに夜半の煙とのほりしや鷺の高ねにかへる白雲

〔長秋詠藻〕下・釈教部

右の四一六番を、『轍塵抄』は

深人猶是見十方佛

大夫俊成

^{統千} 静ナル庵ヲシメテ入ヌレハ一方ナラヌ光ヲソ見る

〔轍塵抄〕安樂行品

とし、『長秋詠藻』ではなく、『続千載和歌集』を典拠としたことが分かる。

安樂行品、深入禪定見十方仏（皇太后宮大夫俊成）

九四八 しづかなるいほりをしめて入りぬればひとかたならぬひかりをぞみる

〔続千載和歌集〕卷十・釈教部

続く四一七番は『続千載和歌集』卷十・釈教部にも採られた歌である。

涌地品心ヲ

大夫俊成卿

池水ノ底ヨリ出ル蓮葉の争カ濁ニシマスナリケム

〔轍塵抄〕涌出品

涌出品、從地而湧出

（皇太后宮大夫俊成）

九四九 池水のそこよりいづるはちすばのいかでにごりにしまずなりけん

〔続千載和歌集〕卷十・釈教部

『長秋詠藻』四一八番は勅撰集には見えないことから、『轍塵抄』は『長秋詠藻』に拠ったものであろう。

現有着不着

俊成

かり初に夜半の煙とのほりしや鷺の高根にかへるしら雲

〔轍塵抄〕寿量品

勅撰集の入集歌と合わせ、『長秋詠藻』の釈教歌を実海が丹念に拾い上げていった様子が窺える。

定家詠についても同様に撰歌がなされているが、実海が重用したのは『拾遺愚草』であった。『拾遺愚草』下「部類歌」の雑部、二九二五番から二九八五番までは釈教歌の歌群、勅撰集にも入集した詠歌を加えれば、その約三分の一が『轍塵抄』に取り上げられている。具体例を示しておく。

母の周忌に、法花経六部みづからかきたてまつりて供養せし、一部のへうしにかかせし歌、一卷（後略）

〔拾遺愚草〕二九四六番詞書

六卷

二九五一 てらさなむ世世もかぎらぬ秋の月いる山のはに光かくさで

七卷

二九五二 むかはれよこの葉時雨れし冬のよをはぐくみたてしうづみ火のもと

八卷

二九五三 歴劫の弘誓の海に舟わたせ生死のなみは冬あらくとも

〔拾遺愚草〕

これらの定家詠を『轍塵抄』は各品に正しく掲出している。

母の周忌ニ法花経ヲ身つから書て巻くの心を読んで表紙の絵にか、せけるに六卷ノ心を 定家

照さなむ世々もかぎらぬ秋の月入山の端に光かくさで

〔轍塵抄〕寿量品

母の周忌ニ法花経ヲみつから書て卷くの心ヲよみて表紙の絵にか、せけるに七の巻の心を 定家

むかはれよ木の葉時雨し冬の夜をはく、み立し埋火のもと (『轍塵抄』不輕品)

母の周忌ニ法花経を身つから書て卷くの心を読んで表紙の絵にか、せけるに八巻ノ心を 定家

歴劫の弘誓の海に舟わたせ生死の波ハ冬あらくとも (『轍塵抄』普門品)

実海は、『拾遺愚草』からは右の釈教歌群と、『拾遺愚草』冒頭を飾る「初学百首」のうち「雑廿首」の釈教歌群からのみ採歌している。

寿量品

八四 浮世にはうれへの雲のしげければ人の心に月ぞかくる

(『拾遺愚草』「初学百首」)

うき世にハうれへの雲のしけ、れは人の心ニ月ソカクル、 定家

(『轍塵抄』寿量品)

そのほかには若干の勅撰集の例がある。

為ニ母経書ケル時

子ノ道ヲシルヘト頼ム跡アラハ迷シ闇モ空ニハルケヨ 定家

(『轍塵抄』嚴王品)

この歌は『新拾遺和歌集』巻第十七「釈教歌」に、

母のために経書きける時、嚴王品のころを 前中納言定家

一四六七 この道をするべとたのむ跡しあらばまよひしやみもけふははるけよ

と見える。『拾遺愚草』にも載るが(二九四四番)、詞書は、「亡父十三年の忌日に、遺言に侍りしかば、歌よむ人人すすめて結縁経供養し侍りしに、嚴王品」とあり、『轍塵抄』は勅撰集に拠っている。

こうした精確かつ厳正な態度からは、次代へ伝うべき正統的な釈教歌集を編まんとする実海の志が看取される。俊成や定家とともに、かつそれを超える分量で慈円詠が載録されるのは、慈円詠を和歌の正しき流れに位置づけようとしたと捉えることができるだろう。そうした釈教歌集として集大成されたのが『訳和和歌集』であった。

これらの歌群を通覧すると、歌道に寄せられた実海の極めて高い関心が窺われる。近年発見された島地黙雷・大等旧蔵の写本一冊『詠法華二十八品和歌』（盛岡市願教寺現蔵）は、実海による法華經和歌と思しい。⁽¹⁸⁾書写年時は天文十七年（一五四九）八月二十二日、実海入寂から十五年が経っている。同書の表紙には談義所「真徳寺」の名が墨書されているが、この寺院は常陸国真壁郡桜井に位置しており、下野国の天台宗談義所、宗光寺の末寺であった。真徳寺は常陸国千妙寺や月山寺とは招呼の間にあり、学僧たちの往来も頻繁であったと推測される。『詠法華二十八品和歌』に書き留められた二十八首の和歌は、『轍塵抄』『訳和和歌集』等には見えない。慈円をはじめ、先人たちの釈教歌を味読するうち、かきたてられた実海の詠作意欲が『詠法華和歌集』に結実し、一方で『訳和和歌集』や『轍塵抄』所見の釈教歌集を世に送り出したのだと言えよう。

五、

『訳和和歌集』は後に版行され、釈教歌集の編纂にも影を落とすこととなった。

元禄十四年（一七〇二）刊の釈教歌集『片岡山』序文には、『訳和和歌集』に収録された歌を除き、編纂を試みたと述べられている。⁽¹⁹⁾

此書に出る歌廿一代集をはじめ家々の集、或歌合或百首やうのものまで拾ひあつめ侍る、されど法華の要文

のうたにおきて前に詠和集といへるものあり、是に入れたる哥は除き侍るとなん、猶ちかひのあみならねばも
る、うたも多かるべし、

〔片岡山〕

『片岡山』が『詠和歌集』所見の詠を除いたのは、単に『詠和歌集』の歌数が多かったためばかりではない
であろう。『轍塵抄』と同じく、精確な出典に基づく歌集であつたことが大きく関与したと思う。

中世天台の学匠実海を敷島の道へと誘つたのは、「天台座主ニテ和哥ノ達人」、「人の世」を思い続けた慈円その
人だつたのではなからうか。それは元禄に至つてなお、釈教歌集の編纂に影響を及ぼす歌集ともなつて世に残つた
のである。

〔注〕

- (1) 多賀宗集『校本拾玉集』（吉川弘文館、一九七一年）所収。本稿の引用はこれによつた。また、間中富士子
『慈鎮和尚及び拾玉集の研究』（第一書房、一九七四年）、多賀宗集『慈円の研究』（吉川弘文館、一九七九年）、
石川一『慈円和歌論考』（笠間書院、一九九八年）、山本一『慈円の和歌と思想』（和泉書院、一九九九年）、石
川一『拾玉集本文整定稿』（勉誠出版、一九九九年）など参照。慈円の字余り詠については、二〇〇二年十二月、
国文学研究資料館の共同研究「経典解釈としての慈円・尊円の詠法華和歌集」（ロベール・ジャンーノエル氏
代表）に於いて口頭発表を行い、ロベール氏企画の *Les Cygnes de l'étant — Etudes sur la poésie bouddhique japo
naise*（仮題）に「慈円字余詠歌攷」と題して寄稿した。フランス語訳の上近刊予定。

- (2) 引用は『歌論歌学集成』第七卷（三弥井書店、二〇〇六年）による。以下、本稿で引用する歌論のうち、『後
鳥羽院御口伝』『為兼卿和歌抄』『やゐめいと』『兼載雑談』『二言抄』は同じく『歌論歌学集成』の各巻、『八

雲御抄』は日本歌学大系によった。

- (3) 福田秀一『中世和歌史の研究』（角川書店、一九七二年）、荒木浩「心に思うままを書く草子―徒然草への道―」上・下（『国語国文』第五十八巻第十一・十二号、一九八九年十一月・十二月）、同「徒然草」の心（『国語国文』第六十三巻第一号、一九九四年一月）ほか参照。

- (4) 以下、宣長の著作の引用は『本居宣長全集』各巻による。字余り説については、佐竹昭広「玉勝間覚書」（岩波書店、日本思想大系『本居宣長』所収、一九七八年）参照。また、山本啓介「平安和歌における字余り歌―古今集』時代から『千載集』時代まで」（『青山語文』第三十二号、二〇〇二年三月）、同「中世前期の字余り歌とその意識―慈円・後鳥羽院・定家を中心に―」（『青山語文』第三十三号、二〇〇三年三月）、同「中世中期における字余り歌―二条派・京極派の対立を中心に―」（『国語と国文学』平成十九年七月号）など参照。

- (5) 佐竹昭広『萬葉集拔書』（岩波書店、一九八〇年）参照。

- (6) 新編国歌大観により『金葉集』以下『新古今集』までの字余りを検すると、宣長の指摘通りのようである。『金葉集』以下『千載集』まで宣長の説く字余り法則に抵触する例はない。『新古今集』の場合、字余り例は三六六首あり、字余り法則を破る例が二二首見える。その多くを西行・慈円詠が占めている。

- (7) 佐竹昭広「雪山の鳥」（『国語通信』二六六号、一九八四年六月。後に『閑居と乱世 中世文学点描』所収、平凡社、二〇〇五年）参照。

- (8) 引用は岩波新日本古典文学大系による。

- (9) 『愚問賢注』には、経旨歌についても『古今集』序の六義による説明が試みられており、経文を和語に和らげただけの歌は「たゞごと哥」に相当すると解釈されている（『歌論歌学集成』第十巻）。

一、法華經の品などの哥よみ様は、只心をとるべき歟。又詞にてよめるも作例あるにや。

心をとりてたゞことによまむも、詞にかゝりてそへよまむも、ともにくるしからず。(中略) 法門にとりては、そへうた、なずらへ哥などにて候へども、經のまゝにて候へば、たゞこと哥とも申ぬべく候。

(愚問賢注)

具体的作例として、『長秋詠藻』に収載される俊成の詠歌が四首挙げられるが、これらはそれぞれ『新古今和歌集』『新勅撰和歌集』『続千載和歌集』に入集すると共に、すべて『夫木和歌抄』にも採られている。

(10) 『歌論歌学集成』第七卷から、『無名抄』の一文を引いておく。

古人云、仮名^{かな}にももの書く事は、歌の序は古今の仮名^{かな}の序を本とす。日記は大鏡^{おほかがみ}のことざまを習ふ。和歌の詞^{ことば}は伊勢物語ならびに後撰の歌の詞^{ことば}を学ぶ。物語は源氏に過ぎたる物なし。みなこれらを思^{おも}はへて書くべきなり。いづれもく構^{かま}へて真名^{まな}の詞^{ことば}を書^か、じとするなり。心の及^{およ}ぶかぎりはいかにもやはらげ書きて、力^{ちから}なき所をば真名^{まな}にて書^かく。(中略) 又、詞^{ことば}の飾^{かざ}りを求めて対^{たい}を好み書^かくべからず。わづかに寄^よりくるところばかりを書^かくなり。対^{たい}をしげく書^かきつれば真名^{まな}に似て、仮名^{かな}の本意^{ほんい}にはあらず。これはわろき時の事なり。かの古今の序に「花に鳴^なく鶯^{うぐひす}、水に棲^すむ蛙^{かはづ}」などやうに、えさらぬ所ばかりをおのづから色^{いろ}へたるがめでたきなり。

(『無名抄』『仮名の筆』)

(11) 文中の西行詠は、『二言抄』では只詞の和歌の例の中に列挙されている。また、心敬は「姿を飾らで心の艶なる歌」の例として、西行と慈鎮の詠歌を一首ずつ挙げ、「外穢内浄の歌なるべし」とも評している。

(12) 『愚管抄』に関する論考のうち、大隈和雄「歴史叙述のことば——『愚管抄』の場合——」(『日本文学』三十一

—三、一九八二年三月)、同「『愚管抄』における聞き書」(『日本文学』二十九—六、一九八〇年六月)等は、

『愚管抄』の文章が極めて難解であることに触れつつ、解釈を試みている。本稿では本文引用は岩波古典文学大系による。

- (13) 福田益和「『愚管抄』の文章と語法管見」〔訓点語と訓点資料〕第八十八輯、一九九二年三月に指摘がある。また田和真紀子「『愚管抄』における「ㄅ」型副詞」〔国文目白〕通卷三十九号、二〇〇〇年二月は、『愚管抄』の擬音語・擬態語の多用について調査報告を行っている。

- (14) 広田哲通「中世仏教説話の研究」(勉誠社、一九八七年)、同「中世法華経注釈書の研究」(笠間書院、一九九三年)、新井栄蔵・後藤昭雄編『叡山をめぐる人びと』(世界思想社、一九九三年)、広田哲通「中世仏教文学の研究」(和泉書院、二〇〇〇年)に詳しい。同氏「天台談所で法華経を読む」(翰林書房、一九九七年)には引用和歌の一覧も収録されており、『轍塵抄』は叡山文庫本を底本に欠落部分を浅草寺本で補っている。本稿では叡山文庫本を引用しておく。また、内野優子「慶安五年刊『訳和和歌集』翻刻と解題 付校異(一)」〔文献探究〕通卷第三十九号、二〇〇一年三月、渡辺麻里子「法華経注釈書の位相」〔仏教文学〕第二十四号、二〇〇〇年三月等参照。

- (15) 拙著『一乗拾玉抄の研究』(臨川書店、一九九八年)参照。

- (16) 毛利みのり「法華経歌集類聚の方法―訳和歌集について―」『女子大文学』第四十四号、一九九三年三月参照。『轍塵抄』の慈円詠については、石川一氏から『拾玉集』の精選本(支子文庫本)に属するとの御教示を賜った。なお、支子文庫本『拾玉集』については注(1)石川一「慈円和歌論考」、山本一「慈円の和歌と思想」のほか、西丸妙子「支子文庫本『拾玉集』翻刻」〔福岡女子短期大学紀要〕第十七・二十四号、一九七九年六月―一九八一年十二月、同「支子文庫本拾玉集」(在九州国文資料影印叢刊〔第二期〕四、同刊行会、

一九八一年）、同「支子文庫本『拾玉集』について」（九州大学『語文研究』五十一号、一九八一年六月）、同「『拾玉集』諸伝本の形態」（『福岡女子短期大学紀要』第二十八号、一九八四年十二月）に詳しい。

- (17) 『轍塵抄』引用歌のうち、二十首余が『夫木和歌抄』巻第十六「釈教」の部にも採られている。『夫木和歌抄』は新奇な表現や素材を内包し、いわば歌詞と只詞とが混在する類題集として知られ、後世の文学作品に多大な影響を及ぼした（『夫木和歌抄』編纂と享受（風間書房、二〇〇八年）参照）。叡山文庫にも『夫木和歌抄』（写本一冊）が伝存する。天台僧の学芸については、彼等の宗教的著作の範囲に留まらず、『夫木和歌抄』のような類題集が広範に享受されてゆく流れにも注意しておく必要がある。また、寺島恒世「順徳院の歌ことば意識——『八雲御抄』『世俗言』の意味するもの——」（『講座平安文学論究』第十七輯所収、風間書房、二〇〇三年）参照。

- (18) 国文学研究資料館『調査研究報告』第二十一号（二〇〇〇年九月）に、解題と共に全葉の図版を紹介した。

なお、拙稿「常陽寺社攷——雨引観音・石守寺など——」（『仏教文学』第二十四号、二〇〇〇年三月）参照。

- (19) 『釈教歌詠全集』第二巻（東方出版、一九七八年復刻）参照。